

生涯健康教育に関する研究：地域と学校の連携

著者	中出 佳操
雑誌名	生涯学習研究と実践：北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要
巻	8
ページ	161-170
発行年	2005-03-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002291/

生涯健康教育に関する研究 — 地域と学校の連携 —

The research of lifelong Health Education — Cooperation community and school —

中 出 佳 操
NAKADE, Yoshimi

はじめに

健康はその人の生き方に大きく影響することから、生涯学習のテーマとして取り上げることが重要である。なかでも成長発達段階の各期でそれぞれ重要な学習課題があることはすでに報告しているところである¹⁾²⁾。

特に若者の健康づくりは生涯の健康へ及ぼす影響が大であることから、筆者は若者の健康保持に向けて研究を続けている。そこで今までの研究結果から明らかになったこととして、若者だけに働きかけても効果を上げるには限界があるということである。このことは既にヘルスプロモーションという概念の中でも確認されているところであるが、特に若者は、家庭、地域、学校という異なる生活の場からの影響を大きく受けており、それぞれの場で若者に対する大人の同一見解にたった理解と関わりが無ければ、若者への健康教育の効果をあげることはできない。従前より家庭と、地域、学校の連携の大切なことは教育行政の中でもうたわれており、それをどのように具体化していくかが現在問われているところである。

この度、地域の保健医療関係者と学校保健関係者との連携により、若者への健康教育を具体的に展開できたのでそのことをまとめ、今後のあり方を考察する。

I 研究概要と研究経過

檜山管内K町にあるK高等学校は、全校生徒150名という小規模校であるが、中学校高等学校一貫教育を目指している特徴のある学校である。K町は人口7,200人余りで、農業中心の豊かな町である。在学生の大半は近隣の市町村から通っており、卒業後も地元に残る生徒が多い。K高等学校の生徒の健康状況は、筆者らが先に行った道内の高校生の生活実態調査結果³⁾と同様の傾向を示しており、喫煙や性に関する健康問題を抱え、そのことに対しK高等学校の養護教諭と、同町の保健師、ならびに管内を管轄する保健所保健師等が既に自主的に学習会を行っていた。学習会の中で効果的な健康教育活動として、ピア・サポート活動に着目し、導入を試みることとなり、本学（以下北海道浅井学園大学を本学とする）のピア・サポート活動へ

の依頼があった。

<打ち合わせ経過>

平成16年2月 K高等学校養護教諭、K町保健師、檜山管内保健所保健師と大学ピア・サポートサークル顧問である筆者とで今後の活動予定について検討した。話し合いの結果、主体的に健康行動ができる高校生を育てるため、本学のピア・サポートサークルの学生が出前講座を行うと同時に、高等学校内にピア・サポーターを育てる手伝いをするようになった。今年度は初の試みであることから、大学生のピア・サポーターと高校生の有志が事前に交流会を持ち、その中で簡単なスキルトレーニングを行っていくこととした。

平成16年3月、前回の担当者が再度集まり、第2回打ち合わせ会を持ち交流会について具体的内容について検討した。

平成16年6月、K高等学校で関心のある高校生の代表と、本学のピア・サポーターの代表が交流会に関しての打ち合わせを行い、交流会の内容や参加者募集について意見交換をした。高校生と大学生が話し合いを行っている一方で、学校長ならびに学校保健関係教員に、管内保健師と町の保健師と筆者で趣旨説明を行い了解を得た。

<本学ピア・サポーターとK高等学校有志生徒の交流会>

平成16年8月3日、K町において高校生有志と大学生のピア・サポートサークルメンバーが表1のような目的及び内容で交流会を行った。高校生にピア・サポート活動について関心を持ってもらう一方、初めての交流会ということで、日頃思っていることを自由に意見交換し、親睦を深めることを目的とした。「小学生への禁煙プログラム」とは、K高等学校へ町内の小学校から、禁煙教育出前講座を依頼されており、大学生が高校生をサポートしながらプログラム作りをして欲しいという学校からの要望があり、内容として盛り込んだものである。

表1 高校生と大学生ピア・サポーターの交流会プログラム

目的		
①高校生にピア・サポートスキルを身に付けてもらう。		
②小学生に対しての禁煙プログラムを共に考え作成する。		
③生活を共にしながら日ごろ考えていることを話し合い、互いに向上しあう。		
	時 間	内 容
日 目	14:00～14:50	・ピア・サポート活動とは ・導入ゲーム
	15:00～16:30	・スキルトレーニング ピア・サポーターの資質 ・コミュニケーションスキルトレーニング ・問題解決スキルトレーニング ・ミディエーションスキルトレーニング
	21:00～22:00	・ミーティング

二 日 目	9：00～10：45	・禁煙教育プログラムの作成（グループワーク）
	10：00～11：00	・禁煙プログラムの発表

＜K高等学校への出前講座＞

2回目の活動として、平成16年9月12日に本学のピア・サポーターがK高等学校1年生と、2年生全員を対象に、「生と性について」と題して出前講座を行った。

今回は保健師とペアを組んで参加させていただいた。保健師は基礎知識の部分を担当し、ピア・サポーターは実際にどの様に知識を活用すればよいのかについて、様々な内容を通し考えてもらう部分を担当した。今までに数回他の所で性についての講座を担当してきており、生徒達が知りたがっていることや、是非伝えたいことが徐々に明確になってきており、表2の様な内容を考えた。

表2 K高等学校出前講座プログラム

目的 ①高校生が生と性について学んだことを自分のものとして理解でき、健全な行動が取れるよう動機付けをする。 ②高校生同士のサポート体制作りの一環とする。		
時 間	内 容	担 当
40分	保健講話	地域保険師
15分	伝播ゲーム	ピア・サポーター
25分	高校生ラブストーリー	ピア・サポーター
15分	公開質問講座	ピア・サポーター

高校生ラブストーリーとは、異性との交際においてトラブルなく交際できる場合と、トラブルに遭遇してしまった場合とを想定し、現在に焦点を当て高校生としての立場で考え話し合っていくものである。

公開質問講座とは、生徒が知りたいとするニーズの高いものに答えていこうとする試みである。以前筆者らが行った研究結果⁴⁾から、中学生、高校生が1番知りたい知識として挙げる項目が異性の心理や交際の仕方であつが、今回行った事前調査結果にも同様な結果が出ていた。知りたいことが明確に挙がっている以上生徒のニーズとして、これに答える工夫をして行かなければならないと考え、男性は女性に、女性は男性に対し、日頃知りたいと思っていることを書いてもらい、その質問にお互いに答えていくという形を取った。

Ⅱ. 研究結果

1. 大学生と高校生の交流会について

高校生の有志の参加が12名、大学生のピア・サポーターの参加が22名であった。

交流会の結果として、高校生と大学生からのアンケート結果を表3に示す。

表3 交流アンケート結果

プログラム内容	高 校 生	大 学 生
交流会全体の意義	普段交流のない大学生と交流できたこと。	高校生や先輩と交流できたこと。
スキルトレーニング	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話の聞き方や話し方が理解できた。 ・ 聞く態度の大切さを学べた。 ・ 人と話をするにも段階があることが分かった。 ・ 今後友人の相談に役立てたい。 ・ 大学生と一緒に出来たことが良かった。 ・ 少し高度で難しかった。 ・ もっとゲームが出来たらよかった。 ・ 時間が短かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 改めて学びなおした。 ・ 具体的で理解しやすかった。 ・ 皆真剣でよかった。 ・ 高校生と何でも一緒に出来たことで話すきっかけが作りやすかった。 ・ 説明をもっとすべきであった。 ・ 理解したか確認しながらが進めることが大切である。 ・ 時間がもう少しあると良かった。
ミーティング	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人一人が感想を言え、全員がしっかり聞けた。 ・ 自分の気持ちが整理できた。 ・ みんな真剣にできた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全員の発言があった。 ・ 他の人の発言をしっかり聞けた。 ・ 感想だけでなく意見も出し合う時間が欲しかった。
禁煙プログラム作成	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高校生と大学生の違った立場で考えられた。 ・ 皆で意見交換できた。 ・ すごく考えた。 ・ 小学生のために考えた。 ・ 資料の準備が必要だった。 ・ 時間がもう少し欲しかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高校生と大学生の意見交換ができよかった。 ・ 高校生も大学生も一体になり協力し合えた。 ・ すごく協力的だった。 ・ 時間が不足だった。 ・ 高校生がもっと意見を出せる状態を作るべきであった。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 普段出来ない体験が出来た。 ・ 大学生は雲の上の人という感じだったが意外とフランクで驚いた。 ・ 人との対話の仕方が分かり楽しかった。 ・ 最初は緊張したけど大学生が盛り上げてくれ楽しく過ごせた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 交流研修は楽しかったが、事前の説明を十分に必要がある。 ・ トレーニングを組み込んでよかった。 ・ 宿泊は親交を深めるのには良い機会だった。 ・ 禁煙プログラムを考える場合、もっと基礎知識の学習が必要である。

普段体験することのない、異年齢の人との交流は、新鮮であり、楽しいものであったことが分かる。年齢が近いだけに短時間で交流を深めることが出来たようであった。宿泊をしたことも効果的で、プログラム以外での話し合いの時間を持つことが出来、満足感が得られた様であった。

2. 高校生への出前講座について

1 学年と 2 学年 1 クラスずつ別々に行った。1 学年男子 24 名、女子 17 名の 41 名、2 学年は男子 13 名、女子 21 名の 34 名であり、保健師が 40 分、ピア・サポーターが 60 分の持ち時間で行った。

実施後の生徒からのアンケート結果、及び見学された職員からの意見をまとめたのが表 4 である。

表 4 出前講座結果

内 容	1 年 生	2 年 生	学校関係者
保健講話	<ul style="list-style-type: none"> ・大変よく分かった。(15名) ・知らないことを詳しく聞けた。(10名) ・懼ったら怖い(9名) ・生理は毎月苦しいけど、子供を生む準備だから仕方がない。(3名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・怖いことが分かった。(7名) ・勉強になった。(6名) ・とても関係のあることが分かった。(2名) ・感染者の多いことに驚いた。(2名) ・性感染症で治りづらいものがあることが分かった。(1名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・とても分かりやすく生徒はしっかり聞いていたと思う。 ・自分も楽しんで聞くことが出来た。
伝播ゲーム	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しかった。(12名) ・クラミジア感染とは思わなかった。(2名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・面白く勉強になった。(15名) ・沢山の考えがあり楽しかった。(14名) ・面白く楽しかった。(9名) ・皆で考えたことが良かった。(9名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学生のピア・サポート活動については異論はない。内容として、保健体育や家庭科との整合性を考慮したほうが良い。 ・今年度は、2 年生は保健体育の授業扱い、1 年生は行事扱いとした。時間的制約があることから、次年度はその点の検討が必要である。
高校生ラブストーリー	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しく良く分かった。(17名) ・なるほどと考えさせられた。(3名) ・恥ずかしかった。(3名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・たった一人の人からすごい勢いで増えることがわかった。(3名) ・ゲームを通し分かりやすかった。(2名) ・オープンに話し合えよ 	<ul style="list-style-type: none"> ・専門家の講話の後だけに、生徒は非常に納得した様であった。

		く分かった。 ・ロマンチックだった。	・最後の押さえをしっかりとすることは必要である。
公開質問講座	・楽しかったし、よく分かった（9名） ・勉強になった（3名）	・異性のことがいろいろ分かった。（3名） ・男女が何を考え行動しているのかが良く分かった。全部聞きたかった。（1名） ・異性に対しての質問に答える場面などがあり楽しかった。（1名）	
その他	・分からないことがいろいろ理解できたし、楽しかった。大学生の皆さんありがとう。（1名）	・感染症は怖いのできちんと治療を受けようと思った。（1名） ・大学生と一緒に出来たのが嬉しくこれからも続けたい。（1名）	

以上のように生徒からは非常に好評で、学習が楽しく出来たことが良く表現されており、活動の狙いとした行動への動機付けの一つの機会にすることが出来たと考える。見学された教員の方からは、他の教科との関連性の検討や、開催時期の問題などが今後の課題として提起された。

4. 考 察

1) 学校教育の中における性教育のあり方について

まず性教育に関する教育課程の位置づけについて検討する。

今回、性教育を行ったK高等学校では、1年生は行事の時間として、2年生は総合的な学習の時間に行った。何故学年によって時間の設定が異なるのであろうか。それは学校教育の中の性教育の位置づけが明確でないからである。性教育に熱心に取り組んでいる田能村⁵⁾は性教育が学校教育の中で発展していかない根本に学習指導要領があると言っている。おおよそ10年ごとに見直しされている学習指導要領であるが、「我が国の文教政策」⁶⁾によると、「現在のものは平成10年の教育課程審議会の答申を受け改訂されてものであり、改定の背景として、日本の教育は能力、適性、意欲に応じ平等に教育の機会が保障され、我が国の発展の原動力になってきている。しかしその反面、少子化、核家族化、都市化に伴い家庭や地域社会の「教育力」が著しく低下し、不登校、青少年の非行問題の深刻化などさまざまな問題が生じる背景にもなっている。受験戦争の激化に伴い、学校教育が知識を一方的に教え込む教育に陥りがちとなり、

思考力や人間性を育む教育や活動がおろそかになってきている。更に教育の機会の平等性を重視するあまり、子供の個性や能力に応じた教育を行うということに十分配慮されてこなかった事等が挙げられている。改定案はこれらのことを考慮し、心の教育の充実、個性を伸ばし多様な選択が出来る学校制度の重視、現場の自主性を尊重した学校づくり等生きる力の育成と、特色ある教育改革などを目指し平成14年から完全実施となっている。」

そのような政策を受け、K高等学校でも総合的な学習の時間の創設や、中高一貫教育設置の推進が行われ始めているところである。しかし性教育に関しては、改革点はなく学習指導要領にその目標すら示されていないのが現状であり、田能村はこの点を問題としているのである。

「すなわち教育目標を各学校にゆだねるということは、目標設定は学校によってさまざまであり、設定するに当たって教員間での共通認識を持つことの困難が予測される。そのような状況下では、少なくとも設定の指針となるべく基本目標の明確化が必要であるがその配慮すらなされず、結果的には単発的な知識の伝達に終わり、発展性が期待できない状況にあるとしている。更に科目としての取り扱いが出来ない以上、各教科や道徳において性教育という視点で授業を行うか、学級活動として性に関する内容を取り扱うことになる。それには、各教科との関連性が求められるであろうし、学級会活動ではどう組み立てるのが大きな問題となってくる。ここでも教員間の性に対する共通認識が大切になるが、その点がいまだ進んでいないのが現状である。また、子供たちのニーズは高まっている割には、そのニーズに答える内容になっていないことも問題である」とも付け加えている。

すなわち現在の学校教育の中で、生と性に関することは、教育目標も時間も内容設定も全て各学校に任せられており、非常に曖昧な状況であるといえる。K高等学校のように、非常に危機感を覚え熱心に取り組む教員がいると、性についての教育の導入がなされるのである。しかし例え効果的な活動であることが明確になっても、学校での位置づけが不明瞭なことから、学年によって時間の設定が異なったり、他の教科とのダブリが生じたりするのである。

問題の多い教育課程ではあるが、これらの問題を理解しつつ、それを変えていくには、日ごろの教育実践を蓄積して行くことであると考ええる。そこで今回の活動を通し、今後学校教育の中で、生と性について継続的教育を行っていくためには次のようなことが必要であると考ええる。

先ず必要なことは教員間の共通認識を持つことである。全員の教員の理解を得ることは時間を要することでもあり、難しいことであるが、各教科との内容調整をする過程で可能になることだと考える。今回は保健講話ということで、単発的な取り組みであったことから、他の教科担当者とは調整を行わなかった。その結果、教員からの評価として、他の教科との調整を行うと最も効果的になるのではないかと指摘があった。当然ながら生と生殖に関することは、理科や社会科、倫理の教科とも関連することから、お互いに内容を吟味し調整することは重要なことであり、そのために、生と生殖に関しても系統だったシラバス作成の必要があると考ええる。特にK高等学校は中高一環教育校でもあることから、中学高校という長期を視野に入れたプログラム作成が可能となる。

プログラム作成に当たり、田能村⁷⁾の教育指針が参考になる。

- ①男性または女性としての自己認識を確かにする。すなわち日本人は自分の存在を他者との関連の中で確認しようとするところからこのことが大切になる。
- ②人間尊重の精神にもとづく豊かな人間関係を築くこと。特に異性とのかかわり方の教育が大切である。
- ③家庭や社会の一員として現在および将来の生活において、性にかかわる諸問題を適切に判断し対処してゆく能力や資質を養うこと。

これらの視点を参考にK高等学校においてプログラム作成を試みた場合、表5のような内容が盛り込むと良いのではないかと考える。

表5 生と生殖に関する教育内容案

基 本 目 標	内 容
性自認	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生命の誕生 ・ 生命の連続性 ・ 性の分化 ・ 性に関するトラブル（感染症、妊娠など） ・ 性役割（生物学的、社会的） ・ 性の特徴（解剖生理学） ・ 自己の性
対人関係	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自己理解 ・ 自尊感情 ・ 他者理解 ・ 異性との付き合い方 ・ コミュニケーションスキル ・ 人との付き合い方のエチケット ・ セクシュアルハラスメント
家庭・社会の一員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭における役割分業 ・ 社会人としての自覚 ・ 性情報 ・ 性の社会問題 ・ 男女平等 ・ ボランティア活動 ・ 性被害と性加害

更にこれらの内容を他の教科と関連させてみたものが表6である。これらをたたき材料とし他の教員と検討することで、共通理解が出来ていくものと考えている。

表6 高等学校における性教育内容例

目 標	1 年	領 域	2 年	領 域	3 年	領 域
性自認	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生命の連続性 ・ 自己の性 ・ 健康増進 	理科 保健	<ul style="list-style-type: none"> ・ 青年期の課題 ・ 性に関するトラブル予防 	倫理 保健	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の生き方 	学級活動
対人関係	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自己表現 ・ 他者理解、自己理解 	国語 学級活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニケーションスキル 	学級活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他者とどう生きるか 	学級活動
家庭社会の一員	<ul style="list-style-type: none"> ・ マスコミ情報の活用 	現代社会	<ul style="list-style-type: none"> ・ ボランティア活動 	学級活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 性役割 ・ 現代の諸問題と生命倫理 	家庭 倫理

生と性教育の位置づけと教科間の検討は行ったが、次に性教育のポイントについてである。

今回は保健師が基礎的な知識部分を講話という形で行った。その後ピア・サポーターが生徒

の参加を促しながら、知識の活用を行い行動変容の動機付けの部分を担当した。

何度かの出前講座を体験し、現在行われている保健講話で、問題と思われる点が三点あると感じている。一点目は、性の問題は生き方の問題であることから、生き方を考えたり、話し合ったりすることが大切であるが、どうしても知識の注入のみに終始してしまうこと。二点目は生徒の要求に応じている内容ではないこと、三点目は現在に焦点を当てた話になっていないということである。これらのことを解決すべく努力することは、これからの生と生殖に関する教育ばかりでなく、あらゆる健康教育にとって大切な視点であると考ええる。

そこで、それらの点を考慮し内容を考えてみた。生徒の最も知りたいという要求に応え、異性間での質問交換を行った。互いに出された質問は答えに苦しむものではなかったが、日ごろ口にしづらいことを公言できたことで関心をより高めることが出来たと考える。

一点目の生き方を考えたり、三点目の現在に視点を当てるという点で考えたのが、高校生ラブストーリーである。高校生が、異性と交際していくなかで、感染症に罹ったり、妊娠という事態が発生した場合、その後の高校生としての生活にどのような影響が生じるのかということを考えてもらうという試みである。この方法は今までの教育が避妊をしなければ妊娠するという話で終わってしまい、妊娠という現象から先を考える機会がなく、自分の問題として考えることが出来ていないのではないかという反省から出た手法である。この試みによって、今の自分にとっての影響をいろいろな意見を基に考えることが出来、その中から今、自分がしなければならないことは何かを考えることが出来て行くものと思われる。日常的に自分の生き方を含めた語り合いの場があることが何にもまして生と性を教育するためには必要なことであると考ええる。参加者に発言の場があることは、どのように話すと分かってもらえるか発言自体が学びとなるであろうし、又他の人の意見を聞くことも広い考えを知る意味から効果的であると考ええる。何よりも楽しさを味わえることに繋がり、楽しく学べるからこそ本来の教育のあり方であると考ええる。そのような意味から、今回のプログラムは生徒の中で好評であったが、今後とも絶えず検討修正して行く必要がある。

2) 地域と学校の連携について

今回は地域の保健を担当する保健師と、学校保健を担当する養護教諭とが、非常によく連携できているところに注目する必要がある。学校現場の現状と、地域の現状をしっかりと分析できたことで、より確かな地域分析が可能となった結果、何が必要なのかが明確になり、共通理解を促し教育展開がスムーズに出来たものと考ええる。

健康教育は学校内で行うのが効果的であることはよく聞くことであるが、今回のように日ごろの教育活動とは別に、外部講師として保健師からの講話を聞き知識をまとめる機会を持つことも効果的手法の一つであろう。しかし、講話をする保健師が学校の実態を把握していなかったり、生徒のニーズが分からないまま行くと、効果半減という事態を招く恐れがある。又ピア・サポーターとのペアでの講話も非常に効果的である。年齢の近い者がすると効果的な部分

と、そうではない部分のあることから、連携して分担することで効果を高めることが出来ると考える。今後は生徒の家庭との連携が必要であろうし、取り巻く地域の人との連携も視野に入れた活動の展開が必要になる。そのためには、ますます、現在の地域保健担当者と学校保健担当者が連携を密にしなければならないと考える。しかしながら今回の活動を見ても、かなりの部分がボランティア的に行われているのも実態である。例えば宿泊研修において、保健師は業務内ではないという理由で、業務を終わらせてから再度参加するなど、個人の積極性に任されている部分も多々あり、このような状況では活動の継続は困難なことから、周囲の理解と協力的体制作りにも配慮しなければならないと考える。

3) 教育評価について

活動に期待する最終目標は、生徒一人一が必要性を理解し行動にまで結びつくことである。従って、時間を必要とするし、評価も大切になる。この度は生徒がどの程度関心を持っているのか、どの程度危機感を持っているのか、実行できる自信はどの程度あるのか、周囲のサポート体制はどのくらいあるのかについて事前調査を実施した。

今後事前調査との関連性を見ることと、出前講座に対しての評価を行っていく必要がある。受講した生徒がどのくらい知識を持続しているのか、どの位態度の変容があったのかについて、3ヶ月後、6ヶ月後等継続的な調査が必要となると考える。又、その結果を基に、どのような間隔でどのような働きかけが必要かについても継続的に検討して行かなければならないと考えている。

本研究は、北方圏学術情報フロンティア研究の一環として行っているものである。

文 献

- 1) 中出佳操「健康教育内容の検討—青年後期に必要なこと」『北海道女子大学短期大学部研究紀要 第38号 2000. P107～118
- 2) 中出佳操「生涯学習に於ける青年期の課題」北海道浅井学園大学生涯学習研究紀要 第4号 2003. P205～213
- 3) 中出佳操「北海道における近年の高校生の生活実態に関する報告」『日本学校教育相談学会北海道支部研究紀要第8号』2004. P70～74
- 4) 穴水ゆかり・中出佳操「効果的な健康教育の為の事前調査」『第52回日本学校保健学会収録集』2004.
- 5) 田能村祐麒『性教育の戦後史と今日的課題』2002. P117
- 6) 文部省『平成11年度我が国の文教施策』平成11年12月. P2～P3
- 7) 5) 前掲. P117